
全てを取り戻す者

ポポス 3 世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全てを取り戻す者

【Nコード】

N3205G

【作者名】

ポポス3世

【あらすじ】

呪いにより失った体。全てを取り戻す為冒険が始まる。

序章

―時は後漢末期―

草原を歩く男一人。

彼の名は、北郷一刀。

又の名を百鬼丸。

この世界にやって来る前に、銅鏡に触れその呪いで48部位を銅鏡の中に住んでいた、48の魔物に体を奪われていた。

この世界に来た時には、新しい体があった。

死んだ人間の体を材料に一刀の体に縫い合わせたのだ。

縫い合わせた医者は一刀に腕に仕込み刀を持たせ、ふらりと居なくなってしまうた。

未だ収まらぬ、戦。

体から差別を受けた人の悲しみを解した男が今立つ。

出会い（前書き）

「ねえ？愛紗ちゃん此処だよね天の御使い様に逢える場所って？」

「はい、桃香様日時も今日で合っています。なんとか間に合ったようですね」

「じゃあ、さっさと見つけようなのだ！」

三人の少女は街に向かって歩きだした。

出会い

一刀はある街に着いた。

そこは正に、戦場と化していた。黄巾党は殆ど帰っていったが、まだ少しばかりいる。

逃げる街の人々、一刀はその中街の人達とは反対方向に進んで行く。

「んだ？おめえ、わざわざ自分から殺されにきたのか？」

「何とか言ったらどうなんだ」

他の黄巾党の奴等が近くに居た子供を切り掛かろうとした時、一刀は刀を抜きあつという間に子供の近くに居た黄巾党を切り倒した。

「くそつチョーシに乗りやがって！！」

次々と一刀に襲い掛かる黄巾党を舞う様に切っていく。

後ろにいた黄巾党は逃げ、一刀は血が着いた刀を払い鞘に納めた。

「大丈夫か？」

一刀は怯えていた子供達にお菓子を渡す。

「……お兄ちゃん。あの人達お父さんお母さんを殺したの……
・仇をとって」

疲れきつた子供の頭を撫でる。その時！！

「お前は黄巾党か！？」

振り向くと綺麗な黒髪をした少女が刀を突き立てて言った。後ろには桃色の髪をした同年齢位の少女と赤い髪をした彼女達より少し歳が低い女の子がいた。

「いいや、俺は旅の者だ」

「此処に居る黄巾党は全部お兄ちゃんが倒したの？」

「ああ、だが俺が来たのもついさっきだ。そこに居る奴等以外は追いつたりしたが、遅すぎたようだ……。」

桃色の髪の少女が一刀を見て怯えている。無理もない、返り血は少ないが辺りの家や壁には血がべつとりと付いていた。

「取り合えず、此処に何しに来たんだ？此処は危険だ何時また奴等が来るか分からねえ」

「私達は桃香様と鈴々と私は黄巾党を討たんと立ち上がった者だ。」

黒髪の少女はそう言いながら刀を引いた。

「今から酒場に行って動ける人達で義勇軍を募って闘うつもりです。」

怯えながらも桃色の髪の少女は言った。

「ちょっとで良いからお兄ちゃんも来て欲しいのだ」

赤い髪の少女は一刀の剣の腕が只者じゃないと分かって声を掛けた。このまま子供を放っている訳にも行かず、一先ず6人で酒場に向かった。

酒場に着き一刀は外で話を聞いた話が終わると、

「ふっ、笑えるな。」

「貴様！何が可笑しい!?!」

「そんな戯言じゃ世界は収まらない。綺麗事を並べたって人が人の差別を止めない限り戦は永遠に続く。世の中甘くないんだぜ。その結果がこの街の景色だ。」

一刀は3人の少女に聞こえる位の声で話す。街の人達は何を話しているのか聞き取れない。

「違うのだ。やってみなくちゃ分からないのだ。」

「まあ、好きにすれば良いs.....」

一刀は何かを感じ取った様に酒場から離れて行った。

「アイツ何を考えている。桃香様、鈴々あの者を追っぞ!」

3人も一刀を隠れながら追って行った。

誰も居るはずが無い家の中から声が聞こえる。人の声ではない。

「いい加減出てきたらどうだ？ 俺の体を奪った魔物よ。」

そう言った途端家から急に魔物が飛び出して来た。

姿はまるで鬼の様だった。

「小僧もしやあの時の小僧か？」

「ああ、俺の体返して貰うぞ！！」

一刀は腰の刀を抜き魔物に切り掛かる。

影から見ていた三人は疑問に思った。一刀の体は誰が見ても両手両足が在るのだから。

一刀は手にある刀を鬼に投げつける。鬼はそれをひらりとかわす。

丸腰になった鬼は一刀に殴り掛る。鋭い爪は一刀の喉に刺さった。

三人はもう駄目だとおもった。鬼は一刀に刺さった爪を抜いた。

一刀は地面に倒れこむ。

もう動かない皆がそう思う。が、次の瞬間。

一刀は起き上がる。起き上がるのと同時に首の傷は塞がっていく。三人は呆然としている。

そして一刀は左腕に右手を沿え左腕を前に引っ張る。

すると腕は抜け、そこからは字が刻まれた仕込み刀が現れた。

そして突っ込んできた鬼目掛けて左腕の刀で切り裂いた。

鬼は一刀を通過すると一気に爆発した。

その場は一時血だらけだったが、血はあっという間に蒸発してしま
った。

一刀は左腕を元に戻す。抜いてから血色が青かった腕はくっ付ける
と血色を元に戻した。

街を出ようとすると一刀を黒髪の少女が呼び止めた。

「待て！！貴様妖怪の類の者だったのか？」

それに吊られて桃色の髪の少女と赤い髪の少女が出てきた。

「お前等が今の闘いを見たのは知っている。お前等は何に見える
？」

「何を言っている？」

「お前等は・・・俺が何に見える？」

目を簡単にくり抜いて魅せる一刀。

「「「っ！！！」」」 三人は口を押さえる。

目を元に戻し背を向け歩き出す一刀。

「……うっ、があああ、うわあああああ!!」

行き成り苦しみ出し、倒れる一刀。のた打ち回っていると左足が取れ、其処から新しい足が生えてきた。そしてその痛みで一刀は気を失った。

三人は一刀を連れ酒場に戻った。看病するため酒場の2階に一刀は寝かせられた。

下に下りると其処には白髭の老人がいた。

「おお、その三人の御嬢ちゃん達少しワシの話を聞いてくれんかのオ？ 君達が見た少年の話だ。」

三人は気になり話を聞くことにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3205g/>

全てを取り戻す者

2010年10月15日22時25分発行